

〈論文〉

## 沖縄県竹富島仲筋集落の余興芸能 「バッサイロン」に関する一考察

— 沖縄・小笠原に伝わったマイクロネシアの行進踊りの系譜とその音楽表現を中心に —

小西 潤子 (沖縄県立芸術大学)

### はじめに

バッサイロン<sup>1</sup>は、沖縄県竹富島仲筋集落に伝わる歌唱をともなう踊りである。この名称は、踊り手が入場行進するときの「レーフライ!バッサイロン」という勇ましい掛け声に起因する。実は、これに類似する踊りが、北西太平洋の各地に分布する。近代以降、西洋や日本などとの接触が進んだマイクロネシアで生み出された「行進踊り」が元となって、広まったのである。沖縄竹富郷友会南青会によるバッサイロンのパフォーマンスは、独自の要素が入り込んでいる。銅鑼の音による幕開け、舞台袖での三線と太鼓の伴奏、祖霊が来訪神のごとくの装束を身につけた男女6人の踊り手の姿は、マイクロネシアの行進踊りでは考えられない異色の演出である<sup>2</sup>。よそから持ち込んだものを「お宝」にまで高める創造性こそが、八重山諸島を「民俗芸能の宝庫」とし続けている原動力だと思わせる。

しかしながら、7分足らずのバッサイロンはただの「余興」と見なされることも多く、ほとんど研究対象にされなかった。本論では、バッサイロンの特徴について民俗知識をもとに多角的に描いたうえで、マイクロネシア、小笠原諸島、沖縄島の行進踊りをとりあげて、それらの音楽表現の比較から系譜をたどる。そして、「余興芸能」としてのバッサイロンを再評価し、その存在理由を問うものである。

### 1. バッサイロンに関する民俗知識

#### 1.1 「竹富島の異色な古謡」《バッサイロン》

まず、バッサイロンはどのような芸能だと認識されているのだろうか。数少ない文献の1つで、新崎は、《バッサイロン》を《シングルロ》《ふあむる歌》(子守歌)と共に「異色な竹富の古謡」と紹介している。これらの伝承者・上勢頭同子氏は、子どもの頃に父・亭から教わった安南(ベトナム)やマイクロネシア方面に出かけた竹富島の人々が「お土産として持ち帰った歌」で、「内容についてはあまりわからない」と述べたという。新崎は、上勢頭氏の歌唱を採譜し、「リズム音階からみる限り、むしろ西洋音楽に近い要素を含んでいる」と分析している(新崎 1992, 246-252)。

長音階のメロディ、2拍子にきちんとはまるリズム、ハーモニー感があることから、「西洋音楽に近い要素を含んでいる」という新崎の指摘は的を射ている。また歌詞に①、②と記しているように、新崎は上勢頭氏が2種類の歌を続けてうたったと聴きとっている。

図1は、新崎の譜例から歌詞を抽出したものである（以下、新崎版）。カタカナ表記された歌詞は見慣れない言語で、最後に「エフライ バッサイロン」という音高のない「掛け声」がある。《バッサイロン》という名称は、この掛け声に起因するといえる。

図1 《バッサイロン》（新崎版）

①	ウワドロイ	ウワドロイ	ギッシギッシシ	ウワドロエンゲメ	メメブックアラレンゲ
	メワドグロ	ゲゲメワドグロ	ゲッセンメワギグロ	アラレンゲギエム	ギシギシギシシ
②	アワレーロン	アワレーロン	ラメフィア	ララララララララル	アラマーサンアン
	テーシーナ	ゲッセンメワ	ギルロ		
	エフライ	バッサイロン	〔この部分は音高がなく、五線譜上では*で示される〕		

※（新崎版）の歌詞（新崎1992の譜例より筆者抽出、〔 〕筆者）

## 1.2 踊りの経験者によるバッサイロンの情報

2009～2010年頃、複数のインターネット上のブログに、バッサイロンの情報が投稿されていた。「のんびりお正月。たけとみにっき」（2009年1月3日付）というブログでは、自らが演じた踊りについて「皆さんが想像するような八重山の伝統芸能ではありません」「バッサイロンと言いまして、戦前サイパン島へ行っていた島民が持ち帰った現地の踊りと歌」（以下、下線は筆者）「小笠原の方にも伝わっている」「変な変装もしますからお笑い系」「うちの近所のオバアもサイパン島帰りなので『これは大事にして欲しい。』と願っています」「初めて見た旅行者にははただの余興に見えたでしょうね」「クリスマス前から練習し、前夜の元旦にも皆で集まり衣装の準備」「大変ですけど、これを繰り返してきた」と記されている。

また、「バッサイロン〔卒たけとみにっき〕」（2010年3月17日付）の執筆者は、竹富島仲筋集落に在住している間にバッサイロンを習得したといい、「古くから竹富島に伝わるものではなく、戦時中、南方へ出兵した島民が現地の芸能を持ち帰った」「同じようなものが小笠原でも行われている」と紹介している。また、「全身を黒く塗りたくり」「各方面から叩かれそうな変装をして掛け声と共に踊る」と述べている。この記述から、バッサイロンは少なくとも竹富島仲筋集落で演じられることがわかる。

この執筆者は、図2（以下、卒たけとみにっき版）のような歌詞を掲載している<sup>3</sup>。そして、《カナカノ娘》<sup>4</sup>で登場し、後に《ウワドロイ〜》に続くこと、“EM”とか“IM”は、「イーエム」とか「アイエム」、「IMラ」は「アイエムラ」と歌うと記されており、後者は「多分現地の言葉で聞き取れなかったところ」と分析している。執筆者本人はこれを新年会で踊ったが、「ことあるごとに仲筋もしくは青年会」が上演するとしている。

図2（卒たけとみにっき版）では、冒頭に図1（新崎版）にはなかった《カナカノ娘》があり、それがバッサイロンの一部を構成することが示されている。ちなみに、《カナカノ娘》には、《カナカの娘》という元歌がある<sup>5</sup>。両者を比べると、第2連と第3

連の後半部分が入れ替わっている。すなわち、元歌では第2連は「太平洋の水鏡 逢ひに行(ゆ) きますポナペ島(じま) / 可愛い男の椰子の小屋」、第3連は「腰みの重ねさらさらとあなたと住む島どれにしよ / 年は13、恋を知る」である。バッサイロンの踊り歌は、《カナカノ娘》の部分も含めて民謡のように口頭伝承されてきたといえる。

図2 《バッサイロン》(卒たけとみにつき版)

<p>号令</p> <p>三. ゲッセメーロン く ゲゲモコー アライエン          マク サリーナー ギッシリン ーMラ エミリ</p>	<p>二. アワレーロン く ダメ フィー ダーメー アラ          マー ダーグ アラマサンガン テーシーナ ボン          ガン ミレミー</p>	<p>一. ウウドロイ く ギッシ く シ          *ウウドロエンデメ メメグック アラレンケ          ミワ ドクロ ゲゲミワ ドクロ ゲッセンメワギ          ルド サボエンディ EM ギッシ</p>	<p>号令</p> <p>三. サイパン後に ヤップ島          跳ねて出て来るカナカノ娘          腰身の重ね サラサラと          会いに行きます ポナペ島 可愛い男の椰子の小屋</p>	<p>カナカノ娘</p> <p>一. 赤い太陽の照る渚 リーフに砕ける波の音を          さむれば闇に鳩は泣く          酋長の娘の膝枕 椰子に抱かれた青い月          二. 沖を漕ぐ船丸木船 細い舳先のあの娘          太平洋の水鏡 あなたと住む島どれにしよう          年は十三 恋を知る</p>
---	---	---	---	--

また、「ウウドロイ」から始まる部分(図1〔新崎版〕①、図2〔卒たけとみにつき版〕後半の一)を比べると、発音の違いはところどころあるが、両者がほぼ同じ歌詞からなると見なせる。さらに、図1(新崎版)②で「ララララララララル」「ゲッセンメワギルロ」となっている部分は、図2(卒たけとみにつき版)後半の二では「ダーメーアラマー ダーグ」「ボンガン ミレミー」になっていること、図2(卒たけとみにつき版)後半の三で「ゲッセメーロン」から始まる連が加わっている点も異なる。以上より、図1(新崎版)の演唱者は直接の伝承者ではなかったこともあって、歌詞に欠落があることが明らかになった。したがって、図1と比べると図2(卒たけとみにつき版)の方が、より「原型」をとどめていると見なせる。

### 1.3 伴奏者にとってのバッサイロン

上記2つのブログには記されていなかったが、バッサイロンの重要な特徴の1つとして、踊り歌に三線の伴奏が付くこと(太鼓が加わることも)があげられる。石垣市の「八

重山浜辺民謡グループ」3代目の三線奏者・花城敏明氏（写真1）は、同じく竹富島出身の地方（ぢかた）の野原政俊氏とペアを組んでバッサイロンの伴奏をすることがある。花城氏保有のバッサイロンの歌詞（図3、以下花城版）には、「河上美奈子公演」とメモ書きされている。

沖縄では、古典芸能のリサイタルにおいてもたくさんの共演者が参加し、プログラムには古典芸能以外の演目が加わることがある。2006（平成18）年八重山古典音楽安室流協和会・河上美奈子氏のリサイタルにおいても、八重山古典音楽以外にも、八重山古典民謡《まへーらつい節》にまつわる劇や石垣市登野城婦人会有志によるバッサイロンが上演された。そのきっかけは、2001（平成13）年石垣市婦人連合会結成25周年記念を祝う第17回藝能大会（11月18日、石垣市民会館大ホール）における出し物として、当時の登野城婦人会のリーダー・黒島郁江氏が「何か面白いものを出そう」とバッサイロンの上演を発案したことであった。竹富島インノタ（玻座間西）集落出身の黒島氏、河上氏らを含む19人の石垣市登野城婦人会メンバーによるバッサイロンは、「竹富島の古い芸能」と紹介された。そして、2002（平成14）年全琉婦人芸能大会（12月22日、那覇市民会館、写真2）にも出演した<sup>6</sup>。以上の情報から、2001年の石垣市登野城婦人会による上演が、バッサイロンのその後の継承にとって大きな転換点となったと考えられる。



写真1 八重山浜辺民謡グループ  
（向かって左から 花城敏明氏、花城實氏、  
大島ちどり氏 於：石垣市 筆者撮影）



写真2 全琉婦人芸能大会那覇大会  
（2002年12月22日、於：那覇市民会館  
河上美奈子氏提供）

さて、図3（花城版）には「本調子」の次の行の「乙乙四合…」他、手書きでメモがいくつか記されている。「乙乙四合…」の部分は、「<sup>くんくんし</sup>工工四」と呼ばれる三線奏法譜である<sup>7</sup>。前半第2節の終わりには、「右左エーフライ」「ドドンドドン、バッサイ…」、後半第2節の終わりの「休み」「エーフライバッサイロン」「すぐ歌う」「入れ替え」「前後入れ替え」の書き込みがある。これらは、演者の掛け声や動き、太鼓の音などで、伴奏のタイミングの目安となっている。

図3 《バッサイロン》（花城版）

バッサイロン こ乙四合尺合上四乙四 本調子

一、赤い太陽の照る渚 リーフに砕ける 波の音を  
 さむれば闇に鳩は鳴く 酋長の娘の膝枕 椰子に抱かれた青い月

二、沖を漕ぐ舟丸木舟 細い船先の あの娘 太平洋の水鏡  
 あなたと住む島どれにしよう 年は十三恋を知る 右左エーフライ  
 サイパン後ろにヤップ島 眺ねて出てくる カナカノ娘

三、サイパン後ろにヤップ島 眺ねて出てくる カナカノ娘  
 腰身のかさね サラサラと 逢いに行きますボナペー島  
 可愛い男の椰子の小屋

一、ウワドロイ ウワドロイ ギッシギッシシ  
 ウワドロエンデメ メメグック アラレンゲ ミワドロク  
 ゲゲミワ ドクロ ゲッセンメワギルド  
 サボエンディ イーエム ギッシギッシシ

二、アワレーロン アワレーロン ダーメーファイ  
 ダーメーアラマアー ダーグ アラマーサンガン テーシーナ  
 ボンガンミーレーミー  
 エーフライバッサイロン / すぐ歌う

三、ゲッセンメーロン ゲッセンメーロン ゲゲモコー  
 アライエンマク サリーナ ギッシリンアイエムラ エミリーナー  
 ギッシリン アイエーム

入れ替え  
 前後入れ替え

花城氏によると、「《バッサイロン》は、昔の青年会が敬老祝いのときにうたったもので、南方から伝わったのではないかと言われている。6番までは歌詞があるが、後の3番は意味が分からない。ヤシの葉っぱをつけて全身を真っ黒に塗った」ということである。歌詞は「6番まで」と認識されているが、歌詞の表記では、1～3、1～3と2曲の組み合わせのように見える。図3（花城版）の冒頭には「カナカノ娘」という題名がないこと、「EM」が「イーエム」「IMラ」が「アイエムラ」となっているなど、図2（卒たけとみにつき版）とは表記の違いがあるだけである。以上から、現行のバッサイロンでは、図3（花城版）または図2（卒たけとみにつき版）の歌詞がうたわれていると見なせる。

#### 1.4 沖縄竹富郷友会南青会によるバッサイロン

2019年1月6日新年祝賀会における余興芸能として、沖縄竹富郷友会南青会が上演したバッサイロン（南青会版）は、「ジャンジャーーン ジャンジャンジャーーン ジャーーン」という銅鑼のリズムと共に開幕し、「トンテントンテ」という三線の弾むリズム、「ドドン ドン」の太鼓で、前半の歌（《カナカノ娘》）の前奏が始まる。実は、三線が付点8分音符と16分音符を組み合わせた2拍（いわゆるピョンコ節）、太鼓は4拍と異なるリズムの単位の組み合わせからなる。そこにのる《カナカノ娘》のメロディは、歌詞のモーラで区切ると「あかい（3拍）／たいよーうの（4拍）／てるなーぎー（3拍）／さーーー（4拍）」と3拍と4拍からなる複合拍子になっている。さらに、「ステップを踏みながら、腰をポンと叩いて、水平に前にあげた腕にもう片方の腕を振り上げて、手を重ねる」踊りの動作は、12拍をひとまとまりとする。そこに、9拍目とか11拍目とか13拍目といったようにランダムに「エーフライ」の号令が入る。



写真3 竹富島仲筋南青会によるバッサイロン（その場足踏み）

（於：那覇市 2019年1月6日 筆者撮影）

前半の曲が終わると、舞台下手を見て、横一列に並んだ状態で「その場足踏み」をしながら、「エーフライ」または「右左」のリーダーの掛け声に「バッサイロン」と他の踊り手が応唱する。その繰り返しの後、リーダーの「ワンツースリー」で全員が正面を向き、その場足踏みを続ける。その間は三線と太鼓の伴奏は休止しているが、リーダーの合図で再び後半の曲の前奏が始まる。後半の曲も、やはり三線のはずんだリズムによってメロディが奏でられるが、基本的には拍節は4拍子系である。

採譜：小西潤子

三線  
太鼓

あ—か—い た いよ—う—の て る な—ぎ—

さ— リー—フ—に— く だけ—る—

な み の— お— と— を—

譜例1 《バッサイロン》(南青会版)のメロディと歌詞の一部

図3(花城版)後半一の3連目の終わり「ゲッセンメワギルド」の後で、少しリタルダンドをつけてゆっくりし、フェルマターをつけて拍をひきのばすのが特徴的である。以上、バッサイロン(南青会版)のメロディと歌詞の一部を記したのが、譜例1である。

行進踊りの踊り歌では、歌詞のモーラと音楽的な拍節がずれることはしばしばある。しかし、ピョンコ節のリズムが使われることはない。三線や太鼓といった新たな要素を取り入れたことによって、南青会版バッサイロンは、音楽的には大変複雑な複合リズムの組み合わせで演奏されることとなった。しかしながら、演奏者も踊り手も難なくこれをこなしている。というのも、彼らは分析的にはなく身体的にそれぞれのリズム感を理解しているからである。

### 1.5 バッサイロンの伝播の経緯

これまでの情報を整理すると、バッサイロンは、複数の歌を組み合わせた踊り歌と掛け声、三線(太鼓が加わることもある)を伴う踊りであること、竹富島仲筋集落由来の演目だが2000年代初めまでには石垣市婦人連合会にも伝わっていたこと、全身を黒く塗って椰子の葉をつけるなど変装をした演者が《カナカノ娘》で登場し、西洋音楽に近

い「現地語の歌」を伴う踊りが続くこと、区切れの部分で「エフライ バッサイロン」という掛け声が入ること、戦前（あるいは戦時中）南方（ミクロネシア方面、サイパン島）に出かけた（出兵した）竹富島の人々が、お土産として持ち帰った現地の芸能（歌、踊り）であること、同じようなものが小笠原諸島でも行われていることが、踊りや伴奏経験者に把握されていることがわかった。

これらに加えて、沖縄竹富郷友会第48代会長（2003年）を務めた一橋恒夫氏から、伝播の時期、持ち帰った場所と人物に関して、次のような情報を得た。琉球古典音楽野村流伝承者・師範でもある一橋氏は、「私たち仲筋会・南青会が保存しているこの踊りは、サイパン島カナカ族の民族舞踊」と回想録に記している（一橋 2015, 79）。また、仲筋集落の南はずれの自宅の裏に青年が集まる場所があり、当時小学校5年生だった一橋氏は、紀元二千六百年の式典（1940〔昭和15〕年11月11日～15日）の祝賀会参加の目的で帰島した請盛りコウ氏が覚えて帰ってきて、ヨウコウ、ヨウキチと共に三兄弟が『『カナカ族の娘』または現代風では『バッサイロン』』を青年たちに教えるのを目撃していたこと、最初は三線の伴奏ではなく、太鼓を使っていたと口述した<sup>8</sup>。また、紀元二千六百年の祝賀会の時について、「村中がお祭り騒ぎで青年団は芸能大会とか、いろいろな催しをやって、とても面白いものだった」（一橋 2015, 25）とも回想している

一橋氏はさらに、1955（昭和30）年頃、竹富島仲筋集落の青年の多くは生活苦と都市へのあこがれから沖縄本島に移住し、1966（昭和39）年南青会（仲筋会）が結成されたことを回想している。その活動の一環として、1987（昭和62）年日本リウマチ友の会沖縄支部主催の同十周年記念チャリティー公演を行い、一橋氏の三線伴奏による「バッサイロン『舞踊』カナカ族」が演じられた（4月14日那覇市民会館大ホール）。その後も、その都度バッサイロンを演じたが、「沖縄（本島）では見飽きたから」やらなくなったとのことであった。

竹富島には、明治になって旧・玻座間村から分離したアイノタ（玻座間東）とインノタ（玻座間西）、そして仲筋の3集落がある。種子取の奉納芸能は、玻座間村対仲筋村の対抗意識のもとで継承されてきた。1967年に初めて、石垣島在住の仲筋集落出身者が結成した「八重山竹富郷土芸能保存会」が種子取の奉納芸能に出演するようになった。しかし、現在に至るまで、石垣島在住のアイノタ、インノタ、仲筋集落出身者は、各集落とのつながりで出演している（狩俣 2019, 18-19）。この継承のあり方は、余興芸能でも基本的に同じであった。それゆえ、バッサイロンは仲筋集落および沖縄竹富郷友会南青会の余興芸能として、戦前から戦後まで継承されてきた。休止期間を経て、2001年に集落のつながりを越えた石垣市婦人会によって上演されたことで、再びバッサイロンは脚光を浴びて広まったのであった。

ところで、バッサイロンの最たる特徴は、演目名にもなった「エフライ バッサイロン」という掛け声を伴う入場行進と「その場足踏み」の動作であることは見逃せない。サイパン島には、もともとこのような特徴をもつ踊りがあったのだろうか？



## 2. ミクロネシアの行進踊り

### 2.1 カロリニアンの《ウアトロフィ》

バッサイロンがサイパン島、テニアン島を含むマリアナ諸島からもたらされたことは、ミクロネシア側の資料からも明らかである。すなわち、松岡静雄の民族誌に掲載されている《ウアトロフィ》（図4、カタカナ表記部分を抜粋）は、《ウワドロイ》（図3〔花城版〕後半の1曲目）の元歌だと同定できるからである。松岡は、これを「ルク島の民謡でサイパン島在住のカロリン人も好んで歌う」と記している（松岡1943, 582-583）。

図4で「イーイー」とされるものが、図3（花城版、後半一）の《ウワドロイ》では「ギッシ」などとなっており、発音の変化は著しいものの類似性は明らかである。なお、カロリニアンは「イーイー」ではなく「イッヒ、イッヒ」と発音するので、「ギッシ」への変化は不自然ではない。

図4 《ウアトロフィ》（松岡1943）

ウアトロフィ イイー イイー / ウアトロフィ イイー イイー ウアトロフィ レミン / メンブゴン アラレンガ / リウエティグラ / ゲゲリウエ ティグラ / ゲセメレン ギリト / サブエマイウエンナリ ヒヒー ヒヒー ヒヒー ヒ
--

《ウアトロフィ》はバッサイロンと類似する踊りを伴うもので、1940年代半ばまでミクロネシアで爆発的な人気を博した（小西2017）。そして、竹富島のみならず、沖縄本島各地、小笠原諸島、日本本土にまで広まり、現在でもサイパン島在住のカロリニアン<sup>9</sup>の演目となっている（図5、写真4）。



写真4 カロリニアン<sup>9</sup>の行進踊り（2004年7月25日 於：パラオ 筆者撮影）

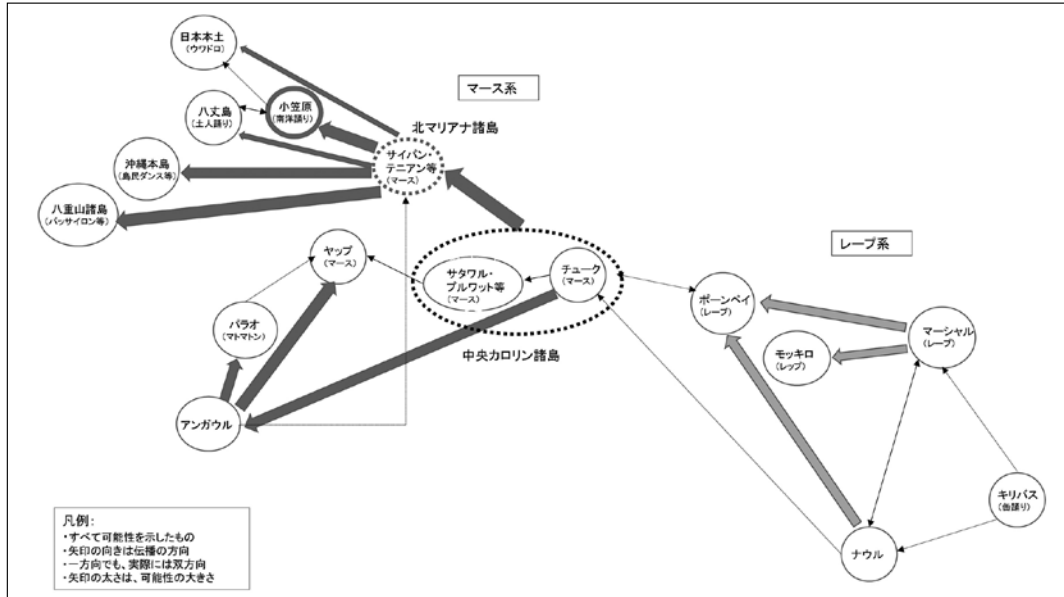


図5 行進踊りの伝播ルート (筆者作成)

ただし、《ウアトロフィ》はカロリニアンが古くから伝えていた「民謡」ではなかった。マイクロネシア起源の歌は西洋音楽的というよりは、「ご詠歌」などのイメージに近いもので、ジャンルごとにおおよそ決まった2～3音からなる旋律型を繰り返すものが多い。《ウアトロフィ》などの現地語の歌は、西洋音楽の影響を受けて成立したので西洋音楽の3要素を含んでいるのである。では、どのようにして西洋音楽がマイクロネシアにもたらされたのだろうか。

## 2.2 行進踊りの成立

中央カロリンを含むマイクロネシアにはキリスト教宣教師に加えて、19世紀には捕鯨業者、貿易商人、軍楽隊、植民地の為政者らが頻繁に訪れるようになった。西洋文化の影響は、1800年代末になってローマカトリック教を受け入れた西カロリン諸島よりも、1800年代半ばにアメリカンボードの宣教師が入って現地の音楽や踊りを禁じた東マイクロネシアの方が大きかった。マイクロネシアの人々は、ある時には皮肉交じりに西洋の歌を模倣したり、その要素を取り込んだ歌を創作したりした (Smith 1998, 717, 720)。歌詞には、現地語のほかにドイツ語、英語、ピジン英語、日本語、マイクロネシアの他言語を含む外来語が混用されることも多い。

同様に、西洋文化の影響を受けて《ウアトロフィ》のような歌や踊りも生まれた。その1つが、マイクロネシアで西洋の軍事訓練を模倣してドイツ統治時代 (1800年代末～1914年) に成立した「行進踊り」である。スミスは、行進踊りについて次のように描写している。すなわち、踊り手は、横一列から数列に並んで、足を前に蹴り上げながら、ひじを伸ばして腕を前後に動かして「その場足踏み」をする、上体は垂直もしくはやや

後ろに重心を置いた姿勢で、足を踏みながら太ももを平手打ちする動作を繰り返す。また、「左、右」にあたるような掛け声を伴い、西洋風のメロディがハーモニカ演奏されたり、現地語または混合言語で現代風の歌が歌われたりする、というものである (Smith 1998, 717-718)。長岡と小西は、行進踊りの型は 20 世紀初頭、西洋の民謡やフォークダンス、軍事訓練の動作などの要素を基に、西洋人との接触が多くキリスト教化が進んだミクロネシア東部で形成され、様式化が進んだと見なしている (Nagaoka & Konishi 2007)。

「左、右」にあたる英語が訛ったような掛け声は、「レップ、ライツ」(ポーンペイ)、「ネップ、ロイ」(パラオ)と地域によって異なる。これが、竹富島仲筋集落では「エフライ」となったのである。これに、「右、左」という日本語の掛け声に加わっている点はユニークである。行進踊りのジャンル名は、レーブ (ポーンペイ)、マース (チューク、ヤップ離島および本島、サイパン島のカロリニアン [中央カロリン諸島出身者])、マトマトン (パラオ) とおおよそ掛け声の「レフト」に起因する「レーブ」系と行進にあたる「マーチ」に起因する「マース」系に分かれる。これらからも、行進踊りが西洋起源であることは明らかである。また、「バッサイロン」に相当する掛け声は、「アスタイロン」(ポーンペイ)、「マスタイロム」(ヤップ)、「アフタイラン」(小笠原諸島) となっている。なお、ヤップでは「マース、マース、マスタイロム」「マスタイロン エ ワンダイフォーウ プルガブット」のように叫ばれる。このうち、プルガブットはヤップ語で「座れ」という意味である。これらの元となったのは、「マーチ・アロン (行進再開)」という英語起源の軍事訓練用語だとも推察される (Nagaoka and Konishi 2007, 19)。

ミクロネシアの人々が西洋の軍事訓練に関心をもち、それを模倣した行進踊りを創作し広めていったのとは裏腹に、キリスト教宣教師や植民地行政官、教師らが「野蛮」で「非道徳的な」在来の踊りに対する禁止や規制をし、代替として西洋起源の行進踊りを認可、奨励していった。行進踊りは支配者に強要されて根づいたのではなく、現地の人々が余興芸能として積極的に踊ったのである。西洋の軍事演習は、在来の戦闘踊りに代わる「新しい戦闘踊り」として受容されて、長ズボンにシャツという洋装で踊られることもあった (田辺 1978, 7)。写真 5 で示したシース環礁 (チューク) の行進踊りでは、西洋風の帽子をかぶっていることがわかる。伝統の縛りを受けない新しい戦闘踊りは、植民地行政官の歓待をはじめ、青年たちの余興芸能としてもおおっぴらに踊られていた。皮肉なことに、西洋風だったからこそ文化の壁を越えて各地に広まったのである。



写真5 西洋風の帽子をかぶるシース環礁（チューク）の行進踊り  
 (2016年5月25日 於：グアム 小出光氏提供)

### 2.3 行進踊りの小笠原諸島・沖縄島への伝播

日本統治時代のミクロネシアには、たくさんの日本人が移住した。とりわけ、1921年松江春次が立ち上げた南洋興発(株)は、その後10年間サイパン、テニアンに16,000人の日本人移民を送り込んだ。すでに海外移民供出経験があること、人々が甘蔗にも親しみがあること、「蘇鉄地獄」と呼ばれた人口過密に苦しんでいたことから沖縄県民に目をつけた(松江1932, 8, 23)。サイパン市庁管内では、1936年には人口45,227人のうち日本人40,836人、さらにそのうちの24,649人を沖縄県民が占めたのである(南洋廳1937, 43-46)。

サイパン島、テニアン島、ロタ島を中心とするマリアナ諸島で人気を博した行進踊りの中でも、《ウアトロフィ》はだれもが知る演目になっていた。竹富島のバツサイロンのもととなったカリロニアン(カリロニア)の行進踊りは、1940(昭和15)年にマリアナ諸島(テニアン?)から持ち帰られたのであったが、それ以外にも沖縄県北部や中部、小笠原諸島や八丈島にも同様の踊りが伝えられている。ここでは、小笠原諸島、うるま市栄野比、宜野座村惣慶の事例をとりあげて、それぞれへの伝播の経緯を紹介する。

#### 2.3.1 小笠原諸島の南洋踊り

小笠原諸島父島においては、1920年代半ば頃から1934年までに、サイパンで覚えてきた欧米系島民ジョサイア・ゴンザレス(1899-1935)らが青年団の人々に普及させたのが始まりである。ゴンザレスは南洋興発(株)サイパン支店で勤務し、1934年には父島に帰島した。当時この踊りは「土人踊り」と呼ばれ、全身を黒く塗って目と口の周りに白い輪を描き、シュロの葉で作った腰みのを巻いて男性のみが踊った。当初の演目には、現地語の歌詞からなる《ウラメ》《ウワドロ》《ギダイ》《締め踊りの歌(アフタ

イラン)》が含まれていた(北国 2002, 134-135)。

### 2.3.2 うるま市栄野比の「島民ダンス」

うるま市栄野比にテニアンから「カナカ・ダンス」(後に島民ダンス)を伝えたのは、大嶺自信氏(以下、自信氏)であった。1940年、南洋興発(株)の年一度の収穫祝いにおける余興芸能として、当時15歳の自信氏は10人くらいの男性とともに、初めて「カナカ・ダンス」を演じた。この出し物を発案したのは、第4農場2班の班長で鹿児島県出身のハットリ氏<sup>10</sup>で、指導したのはカロリニアンではなく日本人だった。週3~4回のペースで夜7~9時まで2~3か月練習し、本番前には鍋の煤を身体全体に塗って真っ黒にした。また、腰蓑をつけて、手には椰子の葉を縛り足にもタコの木で装飾をし、動きを引き立てるようにした。他の出し物も見られないし、雨の少ないテニアンでは、この化粧を落とすのが大変だった。自信氏らの踊りは大変珍しがられ、4~5回舞台に立ったという。ただし、農作業で忙しかったため、他の班の人に教えることはなかったという。

### 2.3.3 宜野座村惣慶の南洋踊り(カナカ踊り)

宜野座村惣慶に「カナカ踊り」(後に「南洋踊り」)を伝えたのは、仲間銀三氏(1924年生まれ。以下、銀三氏)であった。1938年、銀三氏は14歳で南洋興発(株)に雇用されロタ島で勤務したが、1939年にテニアンでサトウキビ栽培を始めた<sup>11</sup>。終戦後、集落の人々は分散していたが、1963年の村芝居のために青年会の10人くらいに「めでたい踊り」としてこれを教えたのが始まりだった。最初は歌と踊りだけだったが、仲原銀助氏が入場・退場の歌に合わせてカンカラ三味線を演奏し始めた。そこに惣慶忠昭氏も加わり、2人で三味線を演奏するスタイルが成立した。当時は、マーニーの木(クロツグ *Arenga engler*)で腰蓑を作り、ビンのふたでガラガラを作った。その後、毎年十五夜の頃に村芝居の幕間芸として上演し、結婚祝いや中学の学芸会でも上演した<sup>12</sup>。

## 3. 小笠原諸島・八丈島・沖縄に伝わった行進踊りとバッサイロン

これまで述べてきたように、竹富島仲筋集落のバッサイロンは小笠原や沖縄本島にも伝わったカロリニアンの行進踊りの系譜に属することが明白になった。行進踊りと見なせるものは、隊列をなした踊り手が舞台に入退場するときや主要部の開始部分、歌と踊りを複数組み合わせることで1つの演目を構成すること、そのつなぎ部分などで行進(あるいはその場足踏み)の動作が用いられること、独立した号令者もしくは踊り手のうちのリーダーが、足並みをそろえ士気を高めるために掛け声を伴うことなどは、共通する型として保持されている。

次の表1は、さきに紹介した小笠原諸島、栄野比、惣慶に加えて、筆者が映像資料を保有する恩納村仲泊、波照間島に伝わる行進踊りについて音楽表現を比較したものであ

る。いずれも演目そのものは固定していると思われるが、余興芸能であるがゆえ、その都度の変化もある。

表1 沖縄・小笠原諸島に伝わった行進踊りの音楽表現比較表

伝承地	うるま市 栄野比	宜野座村惣慶	恩納村仲泊	竹富島仲筋/ 石垣市登野城 婦人会	波照間島西組	小笠原
名称	カナカダンス →島民ダンス	カナカ踊り→ 南洋踊り	南十字星	カナカノ娘→ バッサイロン	南洋土人	土人踊り→ 南洋踊り
入場行進	《酋長の娘》	歌(元歌<カナ <カナカの娘>	《カナカの娘》	《カナカノ娘》	《酋長の娘》	なし
伴奏楽器	ハーモニカ	三線	ハーモニカ	三線 (太鼓・銅鑼)	なし	カカ(打楽器)
掛け声①	レーフ、ライ、	レフ、ライ	レフ、ライ	エーフライ、 右左	ハギジ、ハギジ、 ハイシイシイシ	レフト、ライト
掛け声②	ファスタイロン	バシタイロン	ファスタイロン	バッサイロン		アフタイラン
掛け声③	ファイルストップ		オールストップ	?		オブストップ
掛け声④	ファンダストロン		ファンデステン	?		
掛け声⑤	ワン、トゥー、ス リー、フォー	ワン、トゥー、ス リー、フォー	ワン、トゥー、ス リー、フォー	?		ワン、ツー、スリー
掛け声⑥	デグロップ、デー フダン、ワンダイ ストリゲン	ハウス in ゴー、 マブイメツカイ チューリ!イン ターナショナルダ ンス!	ワトリルシマ、 アワレーロン	?		アナダイ、スリー タイムス
演目①	《ウワトロフィ》	自己紹介	《ウワトロフィ》	《ウワドロイ》		《ウラメ》
演目②	自己紹介	《シーサングー リー》	《アワーレー ロン》	《アワーレー ロン》		《夜明け前》
演目③	《アバイの月》	《ウワトルヒー》	(《ゲセメーラ》)	(《ゲッセメーロ ン》)		《ウワドロ》
演目④	《リーエンナイ シー》					《ギダイ》
						《アフタイラン》
退場行進	《酋長の娘》		《酋長の娘》	《カナカノ娘》		
伴奏楽器		ハーモニカ	ハーモニカ			

### 3.1 踊りの名称・入場行進の歌・伴奏楽器

踊りの名称は、「カナカ」「土人」の蔑称から、「島民」「南洋」へと意図的に変えた伝承地が多い。その中で、「バッサイロン」という掛け声にちなむ改名は、非常にユニークである。なお、仲泊の「南十字星」についての考察は、後ほど行う。

入場行進の歌は、沖縄県内のもは《酋長の娘》(栄野比、波照間島西組)と《カナカの娘》系(惣慶、仲泊、竹富島仲筋集落・石垣市登野城婦人会)に分かれる。ただし、惣慶では元歌の存在が知られておらず、ただ「歌」と呼ばれており、多数の箇所では歌詞の発音が変化している。小笠原諸島では、以前は入場行進の歌があったが断絶し、現行のものでは舞台に並んだところから踊りが始まる。

伴奏楽器は、ハーモニカ(栄野比、仲泊)、三線(惣慶、竹富島仲筋・石垣市登野城婦人会)、なし(波照間島西組)、カカ(小笠原諸島)となっている。三線を伴奏とする

のは、著しいローカル化である。惣慶では、村芝居で他の演目に出演する三線奏者が伴奏を始めたという<sup>13</sup>。沖縄竹富郷友会南青会のチャリティコンサートで三線伴奏が行われたのも、一橋氏が三線奏者だったからである。このように、三線は「沖縄らしさ」を求めてというよりは、上演に際して自然な流れとして伴奏に加わったのである。

三線に加えて、筆者が鑑賞した沖縄竹富郷友会南青会のバッサイロンは、銅鑼と太鼓が用いられていた。小笠原諸島のカカは、メラネシアの割れ目太鼓をモデルに創作されたものなので、太平洋文化圏の産物として違和感がない。ところが、「ゴングチャイム文化圏」(由比 2014, 191) に属しないミクロネシアでは、行進踊りに銅鑼を用いるという発想は生まれない。また、表中にはないが、沖縄竹富郷友会南青会によるパフォーマンスでは踊り手の一部が足に鈴をつけており、行進の動作に伴って「シャリシャリ」と音を発していた。メラネシアやポリネシアでは、踊るときに木の実などのガラガラを足に巻くが、ミクロネシアでは見かけない。ミクロネシアの行進踊りに対する先入観を持っている筆者にとっては、銅鑼や鈴の音は衝撃的だった。

### 3.2 掛け声

次に、掛け声①についても「レーフ、ライ」系(栄野比、惣慶、仲泊)が多い中で、「エーフライ」(竹富島仲筋集落・石垣市登野城婦人会)はユニークである。しかも、「右左」という日本語の号令もついている。「エーフライ」が「左右」を意味することを理解していながらも、わざわざ「エーフライ」と発音しているのである。しかも「エーフライ」が「右左」の叫びと対応していることから、この通りに足の動きを合わせようとする、途中で合わなくなる。こうした矛盾があることで、余興芸能としての滑稽さを保っている。なお、波照間島西組の「ハギシ…」は、バッサイロンでの《ウアドロイ》の一部だと見なせる。

「バッサイロン」にあたる語は、「ファスタイロン」(栄野比、仲泊)以外は、多様である。栄野比、次いで仲泊には、竹富島仲筋集落・石垣市登野城婦人会のバッサイロンには見られない掛け声が多く見られる。行進踊りの中核ともいえる軍事訓練の号令を多く保っていることから、栄野比と仲泊は古い要素を受け継いでいるといえる。しかも、栄野比ではカリロニアンからではなく日本人から習ったというから、当時は日本人にもこうした外来の号令が伝わっていたことになる。ただし、ここで記した自信氏の記憶する号令の多くは、今日の栄野比の島民ダンスには用いられなくなっている。一方、惣慶の「ハウス in ゴー」などは、近年の同青年会による創作である。惣慶の演目②《シーサンダーリー》も、おそらくボーイスカウト活動を通して広まったアフリカの曲であり、ユニークな再構成となっている。

波照間島西組の「ハギシ…」を含めて、すべてに共通するのが《ウアトロフィ》を起源とする歌である。このことから、この歌と踊りが当時のカリロニアンの行進踊りにおいて、最も有名なものだったことがわかる。なお、竹富島仲筋集落・石垣市登野城婦



人会のバッサイロンの《アワーレーロン》《ゲッセメーロン》と仲泊の《アワーレーロン》《ゲッセメーラ》は同曲起源だと同定できる。《ウアトロフィ》以外にもたくさんの踊り歌があったが、その中からそれぞれが記憶したものが伝わったといえる。

### 3.3 演目の内容

竹富島仲筋集落・石垣市登野城婦人会のバッサイロンと最も共通する要素が多いのが、仲泊の南十字星である。また、南十字星は伴奏楽器としてハーモニカを使用する点や、《ワトレルシマ》〔ウワトロフィ〕? 「アワーロン」とリーダーが次の曲名を号令に入れるのは、現行のミクロネシアの行進踊りと共通する。「南十字星」という芝居のタイトルのような演目名も気になるところである<sup>14</sup>。

波照間西組の《南洋土人》は、椰子の葉を括り付けた棒をもった男性の踊り手たちが《酋長の娘》をうたいながら歩き、円になって腰を振りながら「ハギシ…」と言う単純な動きからなる。ミクロネシアの行進踊りに共通する腰振りの動作は、他には見られない点で興味深い。しかし、演目の内容が乏しいことから、随分前に衰退してしまったのか、沖縄内部で伝播したものかのいずれかだと考えられる。

一方、小笠原諸島の南洋踊りは東京都民俗無形文化財に指定されたことで、《ウラメ》《夜明け前》《ギダイ》《占め踊りの歌》と合わせて5曲の踊り歌を保持しており、安定した継承が行われている。

## 4. 結語

ミクロネシアの行進踊りは時代とともに変化し、広まるにつれて各地の地域色が加わっていった。たとえば、パラオの行進踊り（マトマトン）では、ホイッスルを用いた行進の先導や「遊戯」の影響を受けた動作も行われる（写真6）。もとは西洋の軍事訓練であった行進という構成要素が、日本統治時代の公学校における体育の授業を喚起するものへと変化したといえる。だが、日本統治時代の民俗知識をもたない世代は、「慣習的行為」（福島 1993, 136）として踊っているに過ぎない。

一方、日本各地に伝わった行進踊りの担い手たちは、南方から喚起される衣装や装飾品、化粧を時代に合ったものに更新してきた。その中でも、沖縄竹富郷友会南青会の例に見るバッサイロンには、際立った変化が見られる。ふわふわのモールで作った首飾り、スズランテープを細かく裂いたオリジナルのプレスレットやアंकレットなど、椰子の葉を割いた装飾品の代用品は、ヤップ島などミクロネシアの一部ではじわじわと広がっている。だが、10年前には「黒く塗りたくった」と記述されていた扮装の省力化が起こり、黒塗りの代わりにハイテク合成繊維製の比較的廉価なシャツやスパッツを着て黒い身体に変身するのは、三隅のいう「生活環境的変容」（1991）として興味深い。





写真6 パラオの行進踊り（マトマトン）  
（2016年5月25日 於：グアム 筆者撮影）

さらに、注目すべきは化粧の省略可のための仮面の着用である。大山吉昭氏が考案製作した仮面は、茶色や赤をベースに白で目の周りや鼻の部分を縁取った顔面と椰子の葉に見立てた頭飾り、ウィッグが一体となったものである。仮面の表情は、石垣島のアンガマーに登場するウミーのようなおだやかな表情をしている（写真7）。



写真7 竹富島仲筋南青会によるバッサイロンの仮面  
（於：那覇市 2019年1月6日 筆者撮影）

実は、バッサイロンの系譜にあたる踊りは、沖縄県内には「めでたい踊り」として伝わったのであった。テナアンでも収穫祝いの余興芸能として演じられたし、現在でも新年会や敬老祝いなどの宴席で演じられている。彼らの民俗知識の根底にあるのが、この「めでたさ」だったのである。大山氏は、八重山諸島におけるめでたさの表現を仮面に取り入れたのであった。バッサイロンは、南洋への移民と帰島、戦中戦後の困難、生まれ島からの再度の離散を経験という竹富島の人々の歴史体験を喚起させる余興芸能として、その存在意義を保ち続けている。

### 【引用文献一覧】

- 新崎 善仁 1992『八重山民謡の考察』, 刊行委員会.  
 一橋 恒夫 2015『こんどい一齡(よわい) 85を迎えて』, ふたば印刷(自費出版).  
 沖縄テナアン会 2001『はるかなるテナアン』 がじまる印刷.  
 狩俣 恵一 2019「竹富島仲筋村の『棒・父子忠臣・鬼捕り』」『国立劇場おきなわステージガイド華風11号』, 18-24.  
 北国 ゆう 2002「小笠原諸島の民謡の受容と変容—そのことはじめ」ダニエル・ロング編『小笠原学ことはじめ』南方新社, 129-160.  
 小西 潤子 2017「松岡静雄が公刊したミクロネシアの民謡と手稿『南寫』の比較分析—沖縄県出身の南洋移民が耳にした歌の記録をめぐる」『ムーサ』18, 31-50.  
 Smith, Barbara B. 1998 “The Music and Dances of Micronesia”, Kaeppler, A. L. & L. Love eds., *The Garland Encyclopedia of World Music 9: Australia and the Pacific Islands*. Garland Publishing, Inc., 726-729.  
 田辺秀雄企画監修 1978 レコード解説『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』東芝EMI TW-80011.  
 東京都教育庁社会教育部 1987 「東京都文化財指定等議案説明書」.  
 東京都教育庁生涯学習部 2000 「東京都文化財指定等議案説明書」.  
 Nagaoka, Takuya and Junko Konishi 2007 “Western Culture Comes from the East: A Consideration of the Origin and Diffusion of the Micronesian Marching Dance”, *People and Culture in Oceania*, 22, 107-136.  
 南洋廳 1937『昭和12(改訂)版 南洋群島総覧』, 南洋廳.  
 福島 真人 1993「儀礼とその積義—形式的行動と解釈の生成」民俗芸能研究会/第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房 99-154.  
 松江 春次 1932『南洋開拓十年史』, 南洋興発.  
 松岡 静雄 1943『ミクロネシア民族誌』岩波書店.  
 三隈 治雄 1991「民俗芸能の『変容』」『文化庁月報』274.  
 山口 洋兒 2008「ウワドロヒー — 蘇った60年以上前のロタ島での記憶」『ミクロネシ

ア、小笠原、沖縄(B) 報告書 代表者：小西潤子 課題番号：16320117』, 34.  
由比 邦子 2014「古代ジャワの奏楽図浮彫が暗示するインターロッキング文化圏 — インド化の隠れ蓑を被った東南アジア基層文化の自己顕示」『国際文化論集』49, 191-207.

### 【謝辞】

本研究にあたっては、沖縄国際大学・狩俣恵一教授、竹富町誌編纂室・飯田泰彦氏のご助言を始め、バッサイロンを上演して下さった沖縄竹富仲筋会南青会の皆様、インタビューにご協力いただいた一橋恒夫氏、大嶺自信氏、仲間進氏、仲間輔氏、河上美奈子氏、松田博氏、仲間幸夫氏、新里英彦氏、仲原勇夫氏、惣慶忠昭氏、小笠原諸島およびミクロネシア各地でお世話になった方々に感謝いたします。また、本稿のきっかけは、南島文化研究所第206回シマ研究会で発表する機会をいただいたことです。関係者の皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。最後に、調査本研究を進めるにあたっては、JSPS 科研費 16320117 および 26370101 の助成を受けました。

- 1 バッサイロンの表記は、歌（歌唱）を指す場合には「バッサイロン」とする。
- 2 新年祝賀会における余興芸能として上演された（2019年1月6日）。
- 3 手稿の忠実な再現を試みた。執筆者の手稿かどうかは不明。なお、「のんびりお正月。たけとみにっき」および、「バッサイロン [卒たけとみにっき]」は、2019年12月15日「Yahoo! ブログ」終了に伴いWeb上から削除された（2020年2月14日閲覧）。
- 4 「カナカ」、「酋長」は差別用語とされるが、本稿では歴史用語として扱う。
- 5 安藤盛作詞〔読売新聞社編〕、中山晋平作曲、歌：勝太郎（ビクター 52745 - A, 1933年）
- 6 河上美奈子氏へのインタビュー（2018年12月）。
- 7 他にも、飯田泰彦氏が東集落で2008年頃バッサイロンを習得し、三線伴奏のために工工四を作成している（同氏へのインタビュー、2018年8月）。
- 8 一橋恒夫氏へのインタビュー（2019年1月）。バッサイロンの直接のルーツは、「サイパン島のカナカ族の踊り」といえるが、『はるかなるテニアン』（沖縄テニアン会2001）の耕作者名簿に「請盛利行」の名前があることから、リコウ氏はテニアン島から帰島したと考えられる。一橋氏の回想録では、請盛用光氏が伝えたことと記されている。また、振り付けを覚えて帰ったのはオオトミタロウ氏であったとの口述情報も得ている。その後、請盛用光氏は徴兵されて戦死し、請盛家での伝承は途絶えたという（一橋2015, 79）。竹富島仲筋におけるバッサイロン復興の経緯については、まだ十分な情報がそろっていない。

- 9 カロリニアンとは、1815年以降、中央カロリンのエラート（またはルク）、サタワル、ラムトレク、ソーク、オノン、ピセラト、プルワットの7つのサンゴ礁から、飢餓を逃れてグアム、サイパン島、ロタ、テナン島などマリアナ諸島に移住してきた人々の子孫で（松岡 1943, 209-210）、言語や文化を共有するため、カロリニアンと総称される。カナカとは、チャモロ以外のカロリニアンも含めたカロリン諸島民を指して、日本統治時代に用いられた。カナカが差別用語であることから、竹富島仲筋も「カナカの娘」から「バッサイロン」へと名称変更したと考えられる。
- 10 耕作人名簿から、服部豊峯（鹿児島県）氏だと思われる（沖縄テナン会 2001, 315）。
- 11 銀三氏がこの踊りを覚えた場所は不明のままだが、ロタ島、テナン島いずれの可能性もある。ロタ島でも、1942年国民学校の運動会で《ウアトロフィ》の踊りが踊られた記録がある（山口 2008）。銀三氏は、テナン島の「耕作人名簿」では「仲間銀三郎」（沖縄県）と誤記されている（沖縄テナン会 2001, 314）。
- 12 惣慶区の松田博氏、仲間幸夫氏、新里英彦氏、仲原勇夫氏、惣慶忠昭氏へのインタビュー（2013）。
- 13 惣慶区の松田氏、仲間氏、新里氏、仲原氏、惣慶氏へのインタビュー（2013）。
- 14 『沖縄テナン会記念誌』には、テナンの地球劇場で行進踊りの踊り手に扮装した日本人男性と軍服姿の青年たちを撮影した写真が掲載されている。その次のページには、南十字星の写真と共に、仲松美代子氏による「テナンの島の南十字星 昔偲ばする 星の清らさ [ママ]」と沖縄言葉でルビを振った詩が掲載されている（沖縄テナン会 2001, 49-50）。このページの組み方からも、地球劇場で「南十字星」という芝居が上演されたことが示唆される。1937-1938年頃、小笠原諸島父島でも、『南へ』という菊池虎彦氏の創作芝居の一場面に行進踊りが用いられていた（高崎喜久雄氏へのインタビュー、2001年5月）。